

英米文化学会会報

#013 Published 24 Oct 1992

★英米文化学会第80回例会のお知らせ★

日時：平成4年11月21日（土）

場所：文京女子短期大学英語英文学科（本郷キャンパス）下図参照

1 「パークシャー地方でのメルヴィルとホーソン」

発表者： 佐藤成男（玉川大学）

司会： 君塚淳一（神奈川大学非常勤）

2 「英語の動詞形成過程について」

発表者： 武井朗子（日本大学非常勤）

司会： 鈴木俊二（国際短期大学）

3 「アイザック・ウォルトンとピューリタン革命」

発表者： 曾村充利（法政大学）

司会： 山根正弘（創価大学非常勤）

【懇親会のお知らせ】

例会終了後に忘年会を兼ねた懇親会を準備致しました。時節柄、準備の都合がございますので、ご出席の可否を同封の葉書にて11月10日までにご投函ください。尚、懇親会のみへのご出席も歓迎致します。ふるってご参加ください。

会場：文京区本郷「魚邦(ウオクニ)」 電話 03-3811-6105

(学会名で場所の予約をいたしております)

会費：5000円（予定）

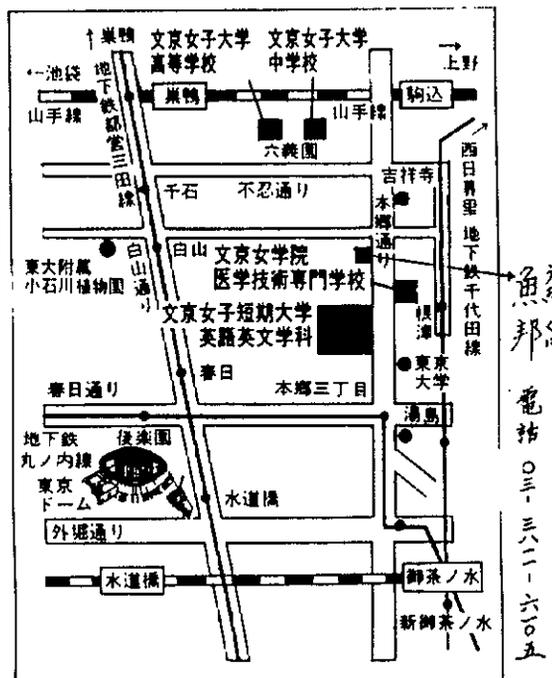
●交通のご案内

英語英文学科(本郷キャンパス)

(JR)駒込駅(南口)よりバスで12分(東京駅八重洲口・御茶ノ水行)、御茶ノ水駅よりバスで12分(荒川土手・駒込駅・王子駅行)、田端駅よりバスで15分(東京駅北口行)

(最寄バス停)本郷追分・文京女子短期大学前下車

(地下鉄)都営三田線白山駅・営団千代田線根津駅より各徒歩10分



魚邦
電話 03-3811-6105

パークシャー地方でのメルヴィルとホーソン

佐藤成男

マサチューセッツ州の西部にあるパークシャー地方は現在は避暑地として有名であるが、19世紀当時は山々の間に小さな湖の点在する、人口も少ない鄙びたところで、都会の喧噪を逃れた芸術家たちがここに集まった。メルヴィルもそうしたひとりで、1850年7月、家族とともにニュー・ヨークから父方の叔母のいるピッツフィールドを訪れ、8月5日、当時近くのレノックスに住んでいたホーソンと邂逅する。折しもホーソンは『緋文字』の出版直後で、一方メルヴィルは『白鯨』創作の真最中であった。メルヴィルがこの出会いにいかにも感動したかは、彼が翌年『白鯨』を発表したときこれをホーソンに捧げていることから窺える。

メルヴィルはそのままピッツフィールドにとどまり、以後13年間そこに住み続ける。一方のホーソンは翌1851年11月5日、レノックスを発ってコンコードに移り住み、それ以後ホーソンが死ぬ1864年まで二人は3度出会うが、実質的な二つの魂の交流はパークシャー地方で終わっていた。

ところでメルヴィルの伝記作者の多くは、この二人の交流を精神分析理論を援用してメルヴィルの一方的な「求愛」だったと分析し、それに怯えたホーソンがコンコードに逃げだしたと解釈する。当発表は、伝記的事実を整理してこの解釈の仕方に検討を加えたい。

英語の動詞形成過程について

武井朗子

英語の動詞形成過程には名詞由来動詞を使う方法（ゼロ派生）と、語幹となる名詞や形容詞に接辞（接尾辞 *-en*, *-ify*, *-ize* 及び接頭辞 *en-*）を添加する方法の二つがある。二つ存在するということは、その機能に何らかの違いがあるということである。

この問題に関しては、生成文法の立場から、Kiparsky(1982)が *Lexical Block* の問題として取り上げている。すなわち、語幹にはまず接辞を用いる動詞化が適用され (*Level 1*)、その適用を受けなかったものには自由にゼロ派生が適用される (*Level 2*)、と結論づけている。しかし、この研究では意味論的アプローチがなされていないため、動詞化されない名詞に対する説明が難しくなっている。

本発表では、語幹の持つ意味的特徴に注目して二つの動詞形成過程の機能の違いを明らかにし、動詞化されない名詞についても考察したい。

アイザック・ウォルトンとピューリタン革命

曾村充利

アイザック・ウォルトンは2冊の著書、『釣魚大全』と『伝記集』を書いたが、主に前者が非常に有名で、後者が読まれることはあまりない。ウォルトン像自体も前者の釣師と重なるものが一般的である。それは、教育はあまりないが、商人として成功し、性格の良さから友人が多く、常識的で、正直、素朴であり、ピューリタン革命の狂乱を避け、イングランドの田園の川や池に釣糸を垂れる、平和な老人の姿である。

しかし『伝記集』を読むと、ウォルトンのもう一つ別の側面が明確に浮かび上がってくる。それは、ピューリタン革命を生き抜いた、王党派にして強力な英国国教会擁護者としての姿である。これに含まれる5人は全て、国教会の著名な聖職者である。

この方面から見ると、ウォルトンには、実に数多くの国教会関係者の友人がいたことに気が付く。この友人たちとの交友はピューリタン革命によっても揺らぐことはなかった。『伝記集』は、この国教会聖職者との協力によって出来ていることを見てみたい。

また、その中に見られるウォルトンの思想が、国教会のそれと大きく重なるように見えることも重要である。さらに、国教会の中でも、議会派との妥協を最後まで拒んだグレート・チュー・サークルと呼ばれるグループの人々と、ウォルトンが、人脈的にも思想的にも近いことを示したい。

《出版》

後藤正次著『時事英語研究序説』2	山口書店	1991
『日本英語教育研究史序説』	山口書店	1992
『英文構成法研究序論』	ニューカレント・インターナショナル	1992
『海を考える』(編注)	ニューカレント・インターナショナル	1992
『総合英語演習』	美誠社	1992
『談話分析理論』(英文)	新東洋出版社	1992

【分科会委員会からのお知らせ】

◆第二分科会からの報告

穴戸絵里香

〔第4回会合〕

日時：9月26日 2時より

場所：文京女子短期大学 高取研究室

出席者：君塚淳一 相良英明 佐藤成男 穴戸絵里香 高取清

君塚淳一氏の発表を中心に、Amy Herrick の "Pinocchio's Nose" を考察。作品は性に目覚める一少女の内的成長を描いたファンタジーで、緻密に配された意味深長なことばと五感を刺激するイメージを堪能しました。次回はTom McNealの "What Happened to Tully" を、穴戸絵里香の発表を参考に研究する予定です。

*次回会合予定： 11月21日 1時より 文京女子短期大学 高取研究室にて

◆第四分科会からの報告

〈第2回分科会準備会合〉

日時 平成4年10月11日 14:00~18:30

場所 日本大学歯学部 佐藤研究室

出席者 五味田幸夫、佐藤治夫、

石井有美、亀山孝、高橋祐子、武井朗子、松村美代子

教材・教授法を模索するために、本学会の先輩諸先生のお話を伺ったり、輪読会をしたりしていろいろ、という話し合いをした。

次回会合予定 11月または12月 場所は未定



【第10回広島大会—回顧と展望】

会長 勝浦 吉雄

去る8月27～28日、本学会の第10回大会が広島市内（広島ガーデンパレス）で開催された。前夜祭に特別講演者としてPeter Milward師（上智大学）をお迎えしての講演会は会員ばかりでなく一般参加もあり、盛会で大会を盛り上げるのに一役買ったように思う。

また、翌28日の研究発表も発表者各人の日頃の研鑽を存分に披露されたように思う。本学会も発足以来10年、研究会から数えると、20数年、四半世紀を越える歴史を有することになる。今回は第10回という一つの節目でもあり、記念すべき大会であったことはいうまでもなく、その大会が過去に例をみないほど充実し、盛会裡に終わったことを会員諸氏とともに大いに喜びたい。このように大会が成功をおさめるには、例年のことながら、事務局を中心に実行委員会の諸氏、その他会員の皆さんが一丸となって準備にご尽力され、協力を惜しまれない賜物であることは言うに及ばず、遅ればせながら、この場をかりて関係各位に深甚なる感謝の意を表したい。

加えるに、研究発表も回を追うごとに充実してきているように感ぜられ、今後ますます進歩向上が期待されるので将来が大いに楽しみである。ただここで、気のついたことを幾つか、失礼を顧みず忌憚なく、あえて言わせて頂くなら、今後の課題として次のような諸点があげられ、そうした諸々のものを克服した暁にはより一層の向上発展が望まれるものと期待したい。

1. マイクの使い方にもう一工夫欲しい。発表者の中にはマイクに近づき過ぎたり、遠過ぎたりで、聴きづらい面もあった。
2. 時間の使い方を工夫したほうがよいと思われる方もいた。自分のことを棚に上げて他人のことを云々するのは忸怩たる思いであるが、時間の配分が大切だと思う。私より2年先輩にあたる方から直接伺った話によると、その先輩は日本英文学会で最初に発表する際に、指導教授に何度もリハーサルさせられたことを過ぎし日の懐しい思い出として語られた。まず時間の配分で、最初は1分超過、次回は2分短かいといって、与えられた時間どおりに合わせるのに苦労された様子。次に内容のチェック。今時、そこまで面倒をみってくれる師がいるかどうか、次第に師弟関係が稀薄になりつつあるので、世話を焼く師も、また焼かれる弟子も少なくなっている。これも時代の流れであろう。結局、自分のことは自分で心掛けるしかないように思う。
3. 研究発表のテーマと発表内容にズレが生じないようにしたい。テーマは発表者が自分で決めるのであるから、内容と密着したものであって欲しい。
4. 発声に気をつけたい。自分ではよく理解していても聴者が理解できないようでは折角の発表がもったいない限りである。（忘言多謝）

【企画委員会からのお知らせ】

<<発表者募集—英米文化学会第81回例会>>

平成5年3月13日（土）に、第81回例会を都内で開催します。つきましては、以下の要領にて発表者を募集致します。

申込先：企画委員会（小野 昌 宛て）

発表者氏名、所属、研究発表題名、希望する発表時間区分（A:20分、B:40分、C:60分）を明記し、発表要旨（400字程度）を添えて、郵送のこと。

締 切：平成5年1月末日（当日消印有効）

【事務局からのお知らせ】

<<会員の動き>>

—新入会員— （6桁の数字は入会年月日）

《会員の新聞紹介》

石田雅近（清泉女子大学教授）著
『英語が面白くなる Q & A 150 ①基本単語』
NHK出版 1,100円

NHKラジオ放送の高校英語の講師や高校用の検定教科書の編集をしておられる石田先生の著作である。

『続基礎英語』に寄せられた聴取者の質問の中から150項目を選び出し、それに対する解答を、中学生や高校生だけではなく、大学生や社会人にも読めるようにあらためて書き直したものである。教師のわれわれにも、単語の説明の仕方などの勉強に役立つことは言うまでもない。

構成は、「効果的な単語の覚え方」から始まって、Part 1 日本語と英語の単語の対応、Part 2 似た意味を持つ英単語、Part 3 単語の由来や歴史、単語にまつわる文化、生活、習慣、の3分野に分けられている。

Q & A の形式で書かれているが、写真や挿絵が多いうえに、改行を多くした文章で読みやすくしているところは、まことに心にくい。

内容的に見ても、『続基礎英語』の生徒の質問だからと言って侮れるものではない。少し拾い出してみると、紅茶はなぜ black tea か？雑誌も弾薬庫もどうして magazine か？ほうちょうも knife でいいか？コップはなぜ cup でなくて glass か？sheep や deer の単数形と複数形が同じわけは？wind と window の関係は？トイレは英米ともに toilet か？corner はすみかかどか？車の窓を開けるのは open か？などの質問もあれば、What does your father do? が「あなたのお父さんはどんな仕事をしているの？」という意味になるのか？というような文の意味に関する質問などもある。

こうした150問もの質問に的確に答えるのは容易なことではないわい、と私などはたじろいでしまう。それはさておき、的確に答えていることだけが本書のねらいではない。書名が示すとおり、本書は単なる事典ではなくて、「英語の単語って面白いんだな！」と英語に興味を感じ、英語を好きになってもらいたいという著者の願いがこめられた“熱い”本なのである。関連事項や発展学習欄として「おもしろメモ」や「レッツ・スピーク」のコーナーが設けられているのも、その一端の現れであろうと思う。

なお、本書の続編として、「表現」をとりあげる第2巻、「言葉のしくみ」に関する第3巻が引き続き今年度中に出版される予定だそうで、大いに期待申し上げたい。
(名和雄次郎)

Rosemary Border / Keiko Tomita 共編著
The Piano -- A Boy and His Dream
桐原書店 テキスト 450円 全訳・解答 50円

富田先生(渋谷女子高)が編集された *The Piano* は、Oxford University Press と桐原書店の提携出版で、高校1年用のサイド・リーダーの1級品として推薦したい。

物語の展開、英文ともさすが本場、しかも OXFORD (O.U.P. の trademark) の最新刊、桐原の話によると、印税は O.U.P. と富田先生の直接契約とか、これは驚き。

物語は、ある音楽家の少年時代をエピソード風にしたもので、「エヴァンズ卿は勉強が苦手で、何のとりえもない少年でした。また、家も貧しく、子供の頃から農場に働きに行かねばなりません。が、その農場でほこりをかぶった古いピアノを見つけたことから、少年の運命は大きく変わっていきます...」(はしがき)と展開する。全体で8章。第1章はイントロで、エヴァンズ卿80歳のピアノコンサート。楽屋にインタビューに来た女性記者の求めに応じて生い立ちを語り始める。第2～7章はいろいろなエピソードの展開。第8章がエピローグで、付き添っている老妻をたたえながら、結婚のなれそめを語って終る。このように、定石どおりの物語の展開であることも入門サイドリーダーの大切な条件のひとつ。

英文は、エヴァンズ卿のピアノのように歯切れのよいリズムミカルな口語体。“The leaves fell from the trees. Winter came. It was dark when Tony got up in the mornings. It was dark when he cycled to his piano lesson, and it was dark when he cycled back to the farm again. Sometimes it snowed. Then he had to walk to and from the school. But he never missed a lesson.” (pp.42-43) という調子で、思わず声に出して読んでみたくなる。

語彙は、OXFORD の選定基準で 700 語レベル (文部省式に派生語もカウントすれば、およそ 1000 語レベル?)。句型・文法事項で見れば、むずかしいところで SVO C (C = 形容詞, 名詞)、関係代名詞はなく、接触節が若干、分詞構文や仮定法はなし、という程度だから、この点でも高校1年生に安心し

て与えられる。

編著者の富田先生は、こういう本文に対して、冒頭に似顔絵つきの「登場人物紹介」を設け、本文に入っては、難語は傍注、連語・構文などは脚注、各章の冒頭に内容把握の手がかりになる日本語による数行のリード、各章末には理解度をチェックするための英文による簡単な質問を添えられた。ほかに『全訳・解答』と「テスト問題」も用意されている。

本文は53ページだが、大小さまざまな挿絵がたくさんあるので、正味30数ページぐらいで、多読・速読の入門に適した長さの物語と言えるだろう。
(名和雄次郎)

後藤正次編著

『日本英語教育史研究序説—英学物語資料』

山口書店 定価5,000円('92年5月20日)

氏の本書の出版目的を「はしがき」から抜粋します。

「日本に英語がいつ伝わり、誰が、どこで教えたのか、私独自の立場から切り込んでいこうと思った。その一つはできるだけ最新の資料を多く集めることであり、二つ目は「英語史」を物語化したことである。」

◎構成は次の5章からなっていますが、それぞれの章の、おもに第1項のみを並記して紹介します。

第1章 英語教育の夜明け

----「三浦按針について」他

第2章 英語教育のはじまり

----「英語教育における長崎の役割」他

第3章 江戸中心の英語

----「幕府と英語塾」他

第4章 明治維新前後の英語教育

----「蘭学から英語へ」他

第5章 明治時代の英語教育

----「維新直前の教育事情」から「明治後期の英語教育」まで

◎資料について

資料年表、関連図書、書簡、記録などの他にヤン・コック・ブロムホフ指導の下に、長崎の通詞たちの作った「単語、熟語、対訳集」等を資料として掲げてあります。

◎氏が意図された「物語化」については、その例として、第2章6英語研究の目的より、原文の一部をお示しします。

もともと、フェートン号事件の影響で、長崎で英語が研究され始めてから、わずか数年経ってから辞典までできたということは当時の人びと、とりわけ通詞がいかに英語の勉強に熱心だったかがわかる。このように勉強心、研究心が旺盛になった原動力は何であったか。これが私たち研究者の関心の的である。結論だけをいえばそれは幕府の国防対策の一環だったということになる。その後、水戸藩で英語が研究され、この『諳厄利亜語林大成』の写本が水戸に保存されていることも、水戸の沖にしばしば訪れる英国の捕鯨船をみて危惧を感じたからだろう。これはちょうど幕末から明治維新にかけて、日本国内が大騒動を起こしている時、各藩は自分の藩の治安を守りたい、と思うとともに英語の必要性を悟り、まるで競争するかのようになり英語研究をし始めた。この各藩の英語研究の目的はちょうど幕府が国全体として国防のために奨励した動機とよく似ている。自分の藩の治安を守る、という点では規模は小さいが、諸藩はいろいろな大砲や軍艦をもたなければならない。兵器や軍艦を作るには、その作り方が書かれている英語の本を解説しなければならない。

そのことが英語研究を旺盛にした根本原因なのだ。(下略)

(深井宏一)

編集発行

英米文化学会編集委員会

発行責任者

相良英明、中村豪、池田宏子、宮崎敬子、山根正弘、君塚淳一

〒

相良英明